◆九頭竜川流域委員会における論点整理（発言要旨集）第9回◆

発言状況等	内容区分			回答	分野	発言要旨	主意	ＩＤ
	質問	課題	提案					
第9回流域委員会			○		環境・利水（生物・景観）	生態、環境に視点を置いた河川整備の基本的な考え方については、以下の4点が重要と考える。 ・河川敷、堤外だけで考えるのではなく、堤内外または流域単位で考える。 ・支川あるいは水路のようなものは、基本的に昔の姿がわかっている場合には昔に戻す。 ・ビオトープ的遊水地等の治水方式も考慮しながら、生態系について配慮していく。 ・水田や遊水地、ため池、里山、林地、これらと河川敷との関係を考慮し、ネットワークの形成を図る。	生態、環境に視点を置いた河川整備の基本的な考え方については、以下の4点が重要と考える。 ・河川敷、堤外だけで考えるのではなく、堤内外または流域単位で考える。 ・支川あるいは水路のようなものは、基本的に昔の姿がわかっている場合には昔に戻す。 ・ビオトープ的遊水地等の治水方式も考慮しながら、生態系について配慮していく。 ・水田や遊水地、ため池、里山、林地、これらと河川敷との関係を考慮し、ネットワークの形成を図る。	901
第9回流域委員会	○			有	環境・利水（生物・景観）	今日は国の直轄管理区間の調査情報を紹介して頂いたが、支川群とか県、市町村では、生物あるいは生態の捉え方、調査、データ等についてどのような状況にあるのか紹介して頂きたい。	－	902
第9回流域委員会		○			環境・利水（生物・景観）	九頭竜川は、サツキマスではなくてサクラマスの川である。私の父は福井で生まれて育ったのですが、足羽川から船で若い衆が投網でサクラマスをとったりとか、あるいはカワマス、大野あたりでもそういうものがたくさんとれたという話を聞いた。サクラマスというのは富山の鱒寿司、その鱒寿司の鱒はサクラマスだという話を仁愛大学の加藤先生に伺った。	九頭竜川は、サツキマスではなくてサクラマスの川である。	903
第9回流域委員会		○			環境・利水（生物・景観）	サクラマスとサツキマスというのは、ヤマメの子供であるのかアマゴの子供であるのかで決まる。九頭竜川は大変難しい地域であり、サクラマスとサツキマスが混在するところに指定されている。実際に日野川のある調査地点では、サツキマスとサクラマスが大体五分五分ぐらいで採取されている。	九頭竜川の実態としてはサツキマスとサクラマスが生息している。	904
第9回流域委員会		○			環境・利水（生物・景観）	ウグイとギンブナとニゴイについては、日本の国内の多くの河川で見られるので、九頭竜川を特徴付ける魚類とは考え難い。アジメドジョウというのは西日本を特徴づける魚類であり、カマキリ（アラレガコ）は中部地方を特徴づける魚類である。ウツセミカジカについても非常に分布域が狭い。このように魚によって特性が異なるので、九頭竜川を特徴づける生物の抽出にあたっては、何を保全していくのか、その目的を明確にする必要がある。	九頭竜川を特徴づける生物の抽出にあたっては、何を保全していくのか、その目的を明確にする必要がある。	905
第9回流域委員会		○			環境・利水（生物・景観）	環境を保全していく場合に、どの辺のところに環境の目標を設定していくのか。高度成長がかなり環境を破壊してきているので、その前までぐらいのところにスタンダードを置くのか、戦後の原風景のところに置くのか、現在のところに置くのか、また戻すことが可能であるのかどうか、そういうことを含めて考えていく必要がある。	環境の目標設定にあたっては、過去にそのモデルを求めるのか、現在に基点を置くのか、また戻すことが可能であるのかという視点を含めて検討が必要。	906
第9回流域委員会		○	○		環境・利水（生物・景観）	河川景観を考える場合には、いろいろ幅広い年齢層の方たちに河川に親しんでもらうことが重要である。そのためには自然景観だけではなく、人工的な景観を創造していくことも必要と考える。 また、いろいろな古老の方に聞いて、昔、九頭竜川のここにこういうものがあった、そういうものを調べて、それがもし復活が可能な場合には復活させていくことも考えられる。	河川景観を考える場合、幅広い年齢層を対象に親しんでもらうために、自然景観だけではなく人工的な景観を創造していくことも必要。	907
第9回流域委員会		○	○		環境・利水（生物・景観）	自分が子供を育てたり、川と親しんできた生活者としては、九頭竜川の河原でメダカをとったことなどを思い出す。身近にメダカ等が見られるような九頭竜川が再生されることを願う。	身近にメダカ等の魚が見られるような九頭竜川の再生が必要。	908
第9回流域委員会		○			環境・利水（生物・景観）	日本の今の水に係わる文化がどこに根差しているかというと、まだ電気がなかったとき、水道もなかったときからずっと来て、そしてどこの家にも100%電気が通った時点が大体昭和18年ぐらいだと認識されているが、18年ぐらいを一つの目安にするという考え方もある。	過去に環境の目標を設定する場合には、各家庭に電気が通った昭和18年前後を目安にするという考え方もある。	909
第9回流域委員会		○	○		環境・利水（生物・景観）	河川の生物は、一度滅びたら海からは来れないので、今の状態を何とかしてやらないといけないというのが原点である。川の生物というのは歩いてこれない。そうすると、今の状態の川の生物が減らない方向が、原点ではないかと考える。	河川の生物は、一度滅びたら海からは来れないので、今の状態の川の生物が減らない方向が環境保全の原点と考える。	910
第9回流域委員会			○		環境・利水（生物・景観）	アユは日本の99%の河川にいるということであるが、九頭竜川のアユ、あるいは足羽川のアユは日本一だということもあると思う。目標設定については、特徴づけるとか特色を探し出すのではなくて、我々が誇れるものを大いに大事にしていくということでいいのではないかと考える。	目標設定にあたっては、我々が誇れるものを大事にしていくべき。	911
第9回流域委員会			○		環境・利水（生物・景観）	鳥も植物も生態系も大切であると思う。その辺はみんなが共存共栄していくのが理想だが、その基本はやはり人間ではないかということである。ダムの問題等も出くるが、やはり人間が安心して、川に親しみ、暮らせる形の中での共存の目安がどこになるかということを考慮して目標を設定していくべきだと考える。	人間が安心して、川に親しみ、暮らせる形の中での共存の目安がどこになるかということを考慮して目標を設定すべき。	912
第9回流域委員会		○	○		環境・利水（生物・景観）	昭和18年に戻せとか何とか言われても、人間の生活上、また現在の社会上、それを物理的に返すということは、言葉ではできても、なかなかできないのではないかと思う。今後、この形態で河川を維持していくためには、どういうことをなすべきか。また、今後はこういうことをしていって保全していこうと。こういうふうに考え方、発想を変えていただかないと空論になってしまって、余り実のある会議にならないのではないかと思う。	目標設定にあたっては、過去に目標を求めるのではなく、今後この形態で河川を維持していくためにどういうことをなすべきか、といった考え方が重要。	913
第9回流域委員会		○	○		環境・利水（生物・景観）	鳥も大切だし、人間も大切である。環境の保全については、考え方の原点に二者択一の考え方があるうちは解決されないと思う。鳥は、5種類や6種類保護してももうだめです。もうそんな段階ではありません。絶滅に近い種類の方が多い。特にここに出てくるコアジサシは、かつては福井県のどこにでもいたが、今この福井県でお調べになろうと思ったら、1ペアか2ペアいるかいないかの現状である。やはりこれ以上悪くしないという視点が環境を考える上では重要であると思う。	これ以上悪くしないという視点が環境を考える上では重要。	914
第9回流域委員会		○	○		環境・利水（生物・景観）	九頭竜川では魚道に問題があると考える。魚道が十分に稼働しているとは思えない。ほとんどが土砂で埋まったり、半分機能しなくなっている。でこぼこのテトラポットを並び替えるのが河川の原点ではないかという気がする。日野川などでは徐々に並び替えが始まってきたが、それが福井県内のすべての河川で行われ、魚が自由に遡上降下できるようになることが重要であると考える。このことについては費用的にもそんなに高いものではなく、それをやって初めていわゆるサケの回帰、サクラマスの回帰が実現可能になると考える。	魚が自由に遡上降下できるようにすることが重要。	915
第9回流域委員会		○			環境・利水（生物・景観）	現状よりは悪くしない。何をもって現状と捉えるのか、何を悪くしないのか、その内容を整理する必要がある。また、それをどの程度まで持っていくかということ、目標として、どのような内容を設定するのかについても、今後整理が必要である。	現状よりは悪くしない、何をもって現状と捉えるのか、何を悪くしないのか、環境をどの程度まで持っていくかという内容について整理が必要。	916
第9回流域委員会		○	○		環境・利水（親水・利用）	河川環境についても、どこかに九頭竜川の個性を持たせることが必要だと考える。九頭竜川の場合、河川に係わる歴史・文化、そういう視点が一つの個性になるものと考える。また、九頭竜川にはアユ釣りに中部や関西からたくさんの人が来ている。遠くからでもこの九頭竜川にアユを釣りに来るというのは、やはり九頭竜川のアユが美味しいからではないか。このことは九頭竜川の特徴の一つであると考える。	河川環境についても、九頭竜川の個性を持たせることが必要。九頭竜川の場合、河川に係る歴史・文化という視点が一つの個性になる。九頭竜川のアユは九頭竜の特徴の一つである。	917
第9回流域委員会		○	○		環境・利水（親水・利用）	九頭竜川という名前からして歴史を持っている。また、交通の要路として、勝山だけでも四つも五つも渡しがある。小舟渡というのは、小さい舟が渡したのだという名前で残っており、現在でも鵜の島の渡という場所で船をつないだ鎖も残っている。さらに古代から中世にかけては九頭竜川という大河を要塞として合戦の場ともなった。昔の歴史、川を中心にした歴史を考えるだけでも非常に興味深いものが多いので、歴史・文化といった観点を目標の一つに含めるべきであると考える。	歴史・文化といった観点を目標の一つに含めるべき。	918
第9回流域委員会		○	○		環境・利水（生物・景観）	河川環境情報図の取り扱いで、植物の重要種としてはフジバカマなどを薬草として煎じて飲む人が結構いる。よって、この情報が筒抜けになってしまうのはちょっと心配なような気がする。	重要種に係る情報については、非公開とすべき。	919
第9回流域委員会			○		環境・利水（生物・景観）	河川環境情報図の取り扱いで、鳥の場合、特に猛禽などの扱いは極力伏せており、それが原則になっている。魚なども、ある種類についてはそういう取り扱いをしているところもあるので、この資料については回収した方がよいと思う。	重要種に係る情報については、非公開とすべき。	920
第9回流域委員会		○			治水（河川整備）	氾濫シミュレーション結果について、この昭和50年8月型（1/150確率）と昭和34年9月型（1/150確率）が、安全率でいくと、どちらもたまたま1.737、1.732という同じようなものに対してシミュレーションがされているが、降雨パターンの影響を見るためにシミュレーションをしたのじゃないかと思う。同じようなものではなくて、違うようなものについてシミュレーションしないと、効果がわからないのではないか。	降雨パターンの異なる出水を対象として氾濫シミュレーションが必要。	921
第9回流域委員会		○			治水（河川整備）	同じような安全率であっても、浸水深にこれだけ違いが出るというのは、パターンの違うもので計算した場合には、もっと差が出るということになる。治水に係る目標設定に向けて、安全率でいくのか、確率年でいくのかという点は、重要なポイントかと思う。	治水に係る目標設定に向けて、安全率でいくのか、確率年でいくのかという点が重要。	922
第9回流域委員会	○			有	治水（河川整備）	浸水深のマップが0～5.0mまでの段階的な表記になっている。隣接するブロックで浸水深が数mも違うのは、どのような理由からか説明頂きたい。	－	923